

季節

猫山 ゆうか

これはどこかの誰かが感じる季節の流れを短い文章にしてみたものです。少しだけ、人の世界を見てみませんか？

「憂鬱」

春なんて嫌いだ。花粉は飛び交うし虫もいる。くしゃみは止まらず虫に驚かされる日々。目を取り外して洗えたら、なんて何度考えたことか。蜂は耳の横を通り過ぎていくもんだから気が散って仕方がない。おまけに直射日光で暑くなる時きた。ああもう、頼むから快適な春をくれ。

「晴れ続き」

雨が降らない。なぜなのか。一向に涼しくならない。なぜなのか。梅雨はいつたい、どこに行ってしまったのか。つい最近梅雨入りをしたはずなのに。ここまで暑い日が続くと野菜がちゃんと育ってくれるか心配になる。野良猫たちはうまくやっているだろうか。今日の天気も明日の天気も来週の天気も晴れ。てるてる坊主を作り、かさまに吊るす。今年も空梅雨だったらいやだなあ。

「雨」

ひどい雨の時は傘をささずに外を歩くに限る。あれほど楽しくて足が弾むものもないだろう。普段とは違う風景、雨の匂い、雨音、液体の感触。何か悪いものがありそうで怖いから雨水を飲みはしないが、それ以外の視覚、嗅覚、聴覚、触覚を使い全身で大雨を楽しむ。憂鬱になりがちな雨も、ここまでくると楽しいもんだ。

「海」

真上で輝く太陽を手で遮りながら砂浜を歩く。海面がキラキラしていて眩しい。あちこちまふしいしとても暑い。せつかくここまで来たのだから、海へ入ってみよう。ああ、これはいい。水が冷たくて気持ちいい。このまま海に住んでしまいたいくらいだ。そして叶うなら、このまま愛しの君に会いに行きたい。海を深く潜った先、深海にいるアイドルに。

「残暑」

待てど暮らせど秋が来ない。夜も暑い日々が続いているのだ。秋はいつまで夏眠をしているのだ。そして夏はいつまで残業をしているのだ。花火は見頃をとつくに過ぎ

たというのに。プールじまいもしてしまっただけというのに。でもまあ、アイスが美味しい時期がもう少しだけ続くといいのは悪くないかな。

「紅葉」

道に落ちているもみじやイチョウを拾ってクルクルと回す。葉にしようか、キーホルダーにしようか。こつちの方が鮮やかかも。こつちは形が綺麗。これはさすがにポロポロかなあ。なんてことを考えながら歩く。しばらく歩いていると今度はドングリが大量に落ちていた。綺麗でツヤがあるなあ、なんて見ていたら帽子どころか枝までついているドングリが！これは慎重に持って帰らなければ。

「晩秋」

びゅう、と風が吹く。冷たく、肌を刺す風が。今年も冬がやってきたなあだとか、今年こそは炬燵を出すぞとか、あれこれ考えながら歩いていると枯れ枝を踏んだ。パキッと乾いた音を立ててそれは真つ二つに折れた。枝を拾い上げ指揮棒(タクト)にし、指揮者のように振ってみる。憧れの背中。少し怖いアイコンタクト。全てを操る魔法の棒に腕。懐かしい記憶を再生しながら暖かい家

を目指す。

「雪」

皆が寝て静まり返った雪降る夜、庭に出てブルーシートを引き横になり目を瞑って耳をすませる。しばらくすると聞こえてくる。「しんしんと降り積もる」とはよく言ったものだ。雪の降り積もる音がするのだ。人々の生活音が聞こえないくらいに静かで、だからこそ雪の降る音がする。そんな静かで騒がしい夜が大好きだ。

「ふきのとう」

雪が融け始めた。そう、ふきのとうが顔を出し始めたのだ。ちいさいやつから大きいやつまで十人十色の、いや、十ふきのとう十色の顔を見せてくれる。私がふきのとう大好きだったら収穫していただろう。悲しいことにふきのとうが食べられないのでそのままにしておく。彼らが大きく育ち、花を咲かせてくれるのが楽しみだ。